

美佐子が優香の膣に挿入した指を激しく動かす。尖らせた舌尖が、再び捕らえた尻の狭間の窄まりを強く舌尖をねじこむように舐め、優香を、彼女が待望んだ絶頂へと導いていく。

「おお！」

私は、優香の上げる激しい快樂の声を聞きながら、美佐子の背後からその回した手で乳房に触れる。薄い汗に濡れたその乳房は、彼女の興奮を示すように熱く、その頂点では乳首が固く尖っていた。

手の中の柔らかな乳房の感触と、指先でこね回す固い乳首。その感覚のコントラストの中で私は、前方の激しく乱れる優香を見、そして食欲に指を啜えこむその秘部を視姦する。

私の中で生じた激しい欲望が股間に集中し、そこで一つの塊を形成する。

「あっ！ ああ！！」

いっそう激しくなった美佐子の指の動きによって、優香の秘部が蠢き、その犯す指を締め付ける。

「凄いわ……」

激しい彼女の反応に美佐子が思わず呟いた時、優香が声にならないほどの早い調子の快樂の声を上げ、舌によって刺激されている窄まりが早い調子で収縮を繰り返す。

「だめっ！ もう、もうだめっ！」

優香が激しい息遣いの中を貫くように、身体の中から絞り出すようなせっぱ詰まった声を上げる。

「！」

次の瞬間、優香の秘部は美佐子の指を強く深く啜えこみ、そんな淫らな動きに連動して後ろの窄まりが大きく収縮する。同時に彼女の背中中は激しく反り返り、そして発した絶頂の声は叫びのようであった。

短くしかし長い一瞬を迎えた後、優香はその余韻の中でソファアの背を掴んだ手で脱力していく身体を支え、無意識に小さな痙攣を繰り返す。

美佐子が肉穴からべっとりとしたたりに濡れ、ぬめる指をゆっくりと抜いていく。

その感触のため息を吐く優香が美佐子を振り返る。美佐子が彼女の背中に覆い被さるように身体を重ねあわせ、そして二人の女が互いの舌を絡み合わせる。

私はそんな女達を見詰め、自分の昂ぶりを意識する。

私が目前の美佐子の尻を両手で掴み、その濡れた狭間を大きく剥き出しにすると、彼女はすぐさまそれに応え、腰をくねらせる。

ぬめった秘部の肉襞が割れ、その奥の熱く滾った膣穴からは白濁した欲情のしたたりが滲み出していく。

私は一気に彼女の中心を貫く。

「ああっ！」

私の下腹部によって強く押された尻が柔らかく潰れ、そしてなめらかなカーブを描く背中に快樂の波が伝わっていく。

熱く溶けるほどにぬめった彼女の肉穴は、私の激しい猛りをスムーズに受け入れ、秘肉を剛直に絡み付かせてくる。

私が彼女の尻を掴む手に力をこめ、更に深い挿入を求めて左右に開くと、彼女は片脚を持ち上げ、股間を大きく開いた。

私が掴んだ手を支点にして動きはじめると、彼女が優香と絡み合わせている舌の動きが喘ぎの息の中で途切れる。

美佐子が快樂に掠れた声で身体の下になった優香に囁く。

「……身体を回して……、こつちを……、こつちをむいて」

私の突き上げる動きに揺れる美佐子の下で、優香がその言葉に従って身体を捻りはじめ、互いに正面を向き合って重なった二人の女達を下にして、私は欲情のままに腰を振る。

美佐子が耐えていたものを吐き出すかのように喜びの声を上げ、その身体は私の動きに合わせて、前後に揺れる。

彼女と私の接点からは淫らな音が立ちはじめ、肉襞の狭間では、剛直がその奥から滲み出す濃いぬめりの中で濡れ光っていく。

大きな喜びの声を上げ、快樂に身悶えする美佐子のその下から、優香が彼女を見つめる。その瞳には新たな欲望の火が灯りはじめていた。

優香が美佐子の身体の下に潜りこみ、目前の、私の動きによって揺れる乳房に顔を寄せる。

「あっ！」

優香の唇が乳房を捕らえ、歯が軽く乳首を噛んだ時、美佐子が声を上げ、身体の動きに別の動きが加わる。

「も、もっと強く……、強くして……」

美佐子が優香に囁きかけ、そしてその手が、自分の身体の下になっている優香の股間を探り当

てる。

新たなしたりを漏らす優香の肉壁の奥に、美佐子の指が潜りこんでいき、そして半ば包皮の中から顔を出している肉の芽を摘み上げる。

美佐子の声に、優香の声が混ざりあう。

私は二人の女の喘ぎ声を聞きながら、美佐子の中に激しく突き入れ、そしてこね回すように腰を動かす。快感と、そして何よりも、重なり合った二人の女の快樂に悶えるその姿に刺激され、私は急速に絶頂に近づいていく。

美佐子が、私を受け入れている部分で、私の絶頂が近いのを感じ取ったのか、大きく尻を振り、肉壁の頂点で突き立つ快樂の尖りを剛直に擦り付けはじめ。それは男と共に絶頂を迎えたいという女の本能の動きである。

私はその動きに強く刺激され、一層腰を大きく振る。

「囁んで……お乳……強く囁んで」

美佐子が、自分の乳首を口に含む優香に、荒い息遣いの中でねだる。

美佐子の胸の下の優香がわずかに動くと、美佐子が苦痛と快感の表情を浮かべ、背中を震わせ、叫ぶ。

「痛いっ、ああ！ イイ、イイわ！ ああ！ イクっ！」

美佐子の上げた絶頂の声と同時に、彼女の秘部が私の剛直を強く締め上げ、そして擦り上げる。

「うっ！」

快樂が剛直の中心を熱い一本の線となって貫いていくような快感の中で、私は彼女と同時に絶頂を迎える。

大量の熱い飛沫が美佐子の内部に注ぎこまれ、その白濁を貪欲に求めるように、彼女の秘肉が蠢いた。

ぐったりとなった美佐子の身体を優しく押しつけ、優香がソファから立ち上がる。

その浮かべた表情は、淫らな行為に酔った者のそれだった。

優香が私に近づく。

一瞬の間だけ彼女が、何かに憑かれたかのような瞳で私を見詰め、そしてむしゃぶりつくようなキスを求めてくる。

彼女の舌が、私の口内を激しく動き回り、そしてその手は、力を失ったばかりの、精液と美佐子のぬめりで濡れる剛直をまさぐりだす。

顔に降りかかる優香の激しい息の中に、私は強い欲情を嗅ぎ取る。

優香の手が私の背中を掴み、そしてその唇が私にむしゃぶりつく。

私と優香が貪りあうような激しいキスを終えて離れた時、美佐子が立ち上がった。その左の乳

房には赤くはつきりとした優香の齒の跡が刻印されている。

美佐子が優香を自分に向き直させる。

「舐めて……」

そしてその言葉を補足するように、彼女は両脚を左右にわずかに開く。

彼女の股間の肉襞から、私が先程その奥に注ぎこんだ精液が零れだし、ゆっくりと流れ落ちていく。

彼女が白濁が糸を引く太股を優香に向ける。

優香はほとんど躊躇もせず、その場に膝を付き、その太股を伝い落ちている白濁の流れに唇を寄せていく。

私はそんな彼女の姿を、新たな欲望が頭をもたげていくのを感じながら見詰め続ける。

美佐子が、自分の太股に舌を這わせ、したたりを舐め取っていく優香の頭を優しく撫ぜ、愛撫を受ける時のように目を細める。

優香の舌は次第に太股をはい上り、遂にその頂点を捕らえる。

「そこも、そこも綺麗にして……奥の方まで……」

美佐子のすでに昂ぶりの色合いを濃くしている声に応えた優香が、その舐める秘部に手を添えて肉襞を押し広げると、再び新しいしたたりに濡れた美佐子の秘肉の奥から白濁の最後の残滓がこぼれ落ちていく。

優香が美佐子の股間の秘肉に唇を押し当てる。

「うっ……」

ぬめる肉襞が優香の唇によつて柔らかく歪み、そこを捲りあげるようにして舌が差しこまれると、その感触に美佐子が顔をのけぞらせ、更に脚を開き、腰を突き出す。

優香の舌がくねり、その先端が美佐子の肉の芽に絡み付き、こね回すように愛撫をはじめた時、その舌に美佐子の新しくそして熱いしたたりが触れた。

左右に大きく広げられ舐めしゃぶられる美佐子の秘肉は、濃いピンク色に充血した粘膜が張りを見せ、その頂点では包皮から突き上げるようにして固くなった肉の芽が際立っている。

美佐子のしたたりと優香の唾液が交じり合ったものが、床に長い銀色の糸を引きながらしたたり落ちていく。

優香は美佐子の尖りを舌の上で転がし、もてあそぶ。

美佐子の開かれた脚が小刻みに震えだし、それに耐えられなくなると、彼女は優香の頭を抱えこんだまま、その場に崩れ落ちていく。

床に座りこんだ美佐子は、脚を大きくMの字形に開き、床に両手を付いた姿勢で腰を浮かせた。その脚の間に優香が、私に尻を向けた格好で床にはい、美佐子の秘肉を再び舌で愛撫しはじめる。

「入れて……舌を……、舌をちょうだい」

喘ぎの中で美佐子が優香に哀願し、彼女がそれに応じる。

優香の舌が美佐子の奥に潜りこみ、二種類の粘液でぬめるその内部を舐め回す。

美佐子はその快樂に小さく途切れ途切れの声を上げながら、私と、再び力を取り戻した剛直に視線を向けた。

「貴方のも……ちようだい。お願い」

美佐子が私を誘うかのように開きぎみにした唇を舌で舐める。

私は、床にはった優香を跨ぐ格好で美佐子に近づき、その唇に剛直を与える。途端に彼女の舌が激しく亀頭を舐め、先端の浅い窪みを擦り上げる。苦痛にも似た異様な程の快感と興奮が私の全身を走り抜ける。

優香が美佐子の肉穴の奥を深くえぐるように舌を動かし、そして抜き去る。そのまま彼女は顔を私の剛直の下で揺れるたれ袋に近づけ、そして開いた唇に啞えこみながらその表面に舌を這わせはじめる。

私は二人の女の前後に揺れる頭に手を掛け、自分に向けて引き寄せ、その快感と淫らさを味わう。

二人の女達の愛撫によって欲望が次の段階に来た時、私は女達を引き離す。

優香が再び美佐子の広げた脚の間にはい、尻を大きく掲げた格好で彼女を舐めはじめると、私は彼女の後ろに回り、その尻と動き、そしてその狭間の二つの肉穴を視姦する。

「脚を広げて」

私が優香に命じると、彼女は待ちわびていたように淫らに蠢く尻を更に高く持ち上げて、脚を開いた。そして更に彼女はその股間の秘部の全てを私の目に見せ付けるよ突き出した。

優香の太股は滲み出した熱いしたりによって鈍い光を放つほどに濡れていた。

そんな私と優香の様子を見つめる美佐子が、愛撫される快感と沸き上がる欲望、そして興奮に滾った瞳を輝かせ、床に付いていた手を優香の尻に持つていき、掴んだ尻房を左右に押し広げる。

私は、痛々しい程に全てをさらけ出している優香に近づき、その肉穴から溢れている愛液を指で掬い取り、奥の秘めた肉までをも覗かせているその上の窄まりに塗り付ける。

美佐子の視線が、そんな私の行為を捉えて興奮の色を強めるなか、優香は、美佐子のだたりをまぶした指で窄まりをほぐされる感触に腰をくねらせる。

私は揃えた指で優香の窄まりを深く犯しながら、そのすぐ下の、したたり落ちる程に濡れた肉穴に剛直を挿入する。柔らかく熱く、そして男に快樂を与える為だけに存在する膣穴のうねりの中で、私は強い快感を得、昂ぶりを更に深める。

私は優香の腰を片手で強く掴みながら、彼女のしたたりが充分に剛直にまとわりつくように腰を使い、その上の窄まりに挿し入れた指を動かす。

狭い腸管の中を前後する指の動きを、私は薄い肉の壁を通して剛直に感じ、一度射精していな

かったならばとても耐え切らない程の快楽を味わう。

優香の上げる喘ぎが大きく激しくなり、身体がピークの前兆に震えはじめる。

「ああ……！ ああ……！」

彼女が舐め続けている美佐子の股間から跳ね上がるようにして顔を上げ、ぬめりに濡れ光る唇が開き、上を向く。

「ダメっ！ 止めちゃイヤ」

興奮と快楽によって昂ぶっている美佐子が叫び、両手でそんな優香の顔を掴み、自分の秘肉に向けて押さえつける。

その瞬間、優香の中の激しい蠢きに押さえ切れない絶頂の予感を覚えた私は、素早く彼女から身を引く。

したたりに濡れ、握り締めた固い拳のように張り詰めた私の剛直が、開放されなかった射精によつてヒクヒクと大きく痙攣し、その下では優香が与えられなかった絶頂に落胆のすすり泣く声を上げ、全身を震わせる。

私はぬめる剛直を握り、射精の緊張が過ぎ去っていくのを待つ。

優香の顔が再び美佐子の股間で揺れはじめ、舌で愛撫される快感に美佐子が目を細め、息を乱しはじめる。

私は目の前の優香の尻の狭間に目をやり、ほぐれはじめている窄まりに再び触れる。

指でゆつくりと撫ぜると、指の下でその窄まりが蠢き、そして内側から盛り上がるようにその形を変えていく。

優香が、美佐子の肉壁に押し付けている為にくぐもったものとなった声で囁く。

「入れて……そこにも下さい……。シテ、思いつきり……。シテ」

私は手を添えた剛直の先端を、彼女の窄まりに当てる。

「ああ！」

おののきのような震えが優香の背中を走り、私はそれを押えこむように彼女の左右に割れた尻房を掴む。

「力を抜くの……大丈夫だから」

美佐子が彼女に囁きかけると、亀頭の下窄まりからわずかに緊張が抜けていく。

私がゆつくりと腰を進めると、優香が短く喘ぎを漏らす。

「息を吐いて、大きく吐くの」

美佐子の言葉に従う優香の窄まりに向けて、私は大きく前進する。きつすぎるその感触は、快感というよりも苦痛に近い。

「ああ！」

優香が声を上げ、そして私は彼女のもう一つの窄まりを犯す。

私は、吹出した汗で濡れている優香の尻に深く根元まで納めきったあと、その下でしたたせ
る程に濡れた肉襷の狭間に指を差し入れ、その頂点の肉の芽を摘み上げる。

指の間で柔らかくこね回すと、広げた太股に小さな震えが走り、その度に彼女の狭い内部が剛
直を締め上げる。私はその動きを楽しみ、快感を味わう。

「動かすよ」

私は限界まで耐え、そして彼女の尻の中の剛直をゆっくりと動かしはじめる。

狭い肉穴を前後に動く剛直の動きによって、彼女のその下の肉穴が歪み、そしてぬめりが滲み
出す。

動くうちに彼女の腰の動きと私の腰の動きが同調し、そして私が深く挿し入れる度に優香は窄
まりを強く締め付けはじめ。

彼女の吐く息が深く、そして大きくなった。

美佐子がそんな優香に囁く。

「お願い、私も、私にも……。強くして、もっと強く吸って、お願い……」

尻の快楽に惚けた顔となった優香が肯き、そして深く美佐子の股間に顔を埋める。

「おおお……！」

美佐子が秘部の中に挿し入れられた舌で肉穴をえぐられ、強く吸い上げられる快感に顔を上げ、
身を震わせる。

美佐子の両手が強く自分の乳房を掴み、形が歪むほどに揉みしだきながら固い乳首を指の間に
挟みこむ。

私はようやく慣れだした優香の窄まりの中で、大きく前後に動く。

まるで幾百本かのゴムの輪を縫り合わせたかのような細い肉の菅の中で私は強い快感を感じ、
彼女の尻房を更に強く掴む。

射精が、中断された射精が再び私の中によみがえる。

私は大きく動きながら、優香の肉襷の中に親指を深く差し入れ、残った指で彼女の秘部を撫で
回す。

優香が剛直を締め上げるように尻を蠢かすと、薄い肉の壁を通して親指にその動きが伝わって
くる。

美佐子の広げた脚の間で優香の顔が大きく動きだし、女達の連続した快楽の声と息遣いの音が
響く。しかし美佐子はそんな優香の愛撫にもかかわらず、片手を乳房から放し、優香の舐め続け
る自分の股間に挿し入れ、激しく愛撫をはじめ。

三人の激しい息遣いが、まるで三重唱のように部屋に立ちこめる。

私は射精をぎりぎりまで耐え、動き続ける。

優香の汗に濡れた歪む尻、汗と交じり合いながら太股にしたたり落ちるぬめり、美佐子の手の中で歪む乳房、快樂の貌。そして私を強く締め付ける優香の窄まりの蠢き。

私は急速に限界に近づいていく。

「いくよ、もうすぐだ」

私の言葉に、優香の舌の動きと、美佐子の手の動きが早くなっていく。

「!」

絶頂の瞬間、私は視野が白くハイキートーンに跳ぶのを感じ、うめきを上げ、そして白濁を優香の中にほとばしらせる。

「ああ!熱いつ!」

優香が叫び、私の親指が彼女のもう一つの中でその蠢きを感じる。同時に美佐子は反射的に固く閉じた脚で優香の顔を締め付け、激しい絶頂の声を上げた。



一時間後。

私達三人は入浴を済ませ、火照った身体が冷めていく爽快感を感じながら、美佐子のセミダブルのベッドに、全裸のまま横たわっていた。

私を中央にして、右に美佐子、そして左に優香。三人には狭すぎるベッドの上で、私達はお互いの腕を触れ合しながら仰向けになっている。

優香の身体からは、私が彼女を抱く直接の原因となった、いつもの香水が香り、美佐子の身体からは、それとは違った香水が匂う。

私は美佐子に言う。

「香水、変えたんだな」

「ええ……。あの匂いは優香にあげたの……。今の匂い、嫌い？」

「いや、良い香りだ」

優香が呟くように言う。

「この匂い、私、大事にするわ……」

美佐子と優香が片方の肘を立て、上半身をベッドから起す。二人の腕が、私の胸の上で繋がれ、お互いに微笑みを交わす。

私は、両腕を二人の身体に回し二人を同時に抱しめる。

三人の腕が、お互いを求め合うように、固く絡まりあう。

そして私はその時、二人の着ける違った香水の匂いが混じり合って新たな匂いとなり、私の心と身体を包みこむのを意識した。

了。

次回、続編へ。